

論文の要旨

論文題目 英語話者による日本語の語アクセントの習得
氏名 レベッカ L. テイラー
学位 博士 (学術)
授与年月日 平成24年3月26日

英語を母語とする日本語学習者はどのように語レベルのピッチアクセントを習得するのだろうか。本論文は、アクセント型はどの程度語ごとに習得されるのか、アクセント付与はどの程度規則に従って行われるのか、そしてアクセント生成は日本語の経験量および個人差によってどのような影響があるかを調査するものである。英語を母語とする学習者を対象に、日本語の経験量の異なる二つの学習者群に日本語の語を読み上げさせ、生成されたアクセント型を音声学の専門知識のある日本語母語話者に判定させるという調査を行い、標準語のアクセント型、拍数、品詞、発話環境といった諸要因の影響を分析した。

その結果、語がどのアクセント型で生成されるかは、日本語の経験量を問わず、標準語のアクセント型にはそれほど影響されないということが分かった。同時に、少なくとも本研究の対象である軽音節のみで構成された語については、各学習者群が生成するアクセント型を語の拍数、品詞、発話環境から予測することができないという結果も得られた。一方で各学習者のアクセント生成に関しては、ある程度の体系性が見られ、生成されたアクセント型と語の種類や発話環境がどのように関係するか、何が標準語から習得されるかについても、個人独特のものであることが明らかになった。

これらの結果から、英語を母語とする日本語学習者には、ピッチを語の特徴として解釈するのが困難であるためか、アクセント型を音韻表象にエンコードすることが困難であることが示唆される。学習者間の大きな差異は、各学習者がアクセント型の音韻表象を持たないことにより、主に非予測的であるアクセント体系を持つ標準語から規則性を探ろうとした結果、形成されたのではないかと考えられる。本論文で得られた最も重要な知見は、第一言語が同じ英語であっても、第二言語の日本語においては、アクセント型の特徴が類似するとは限らないということである。今後の課題としては、音韻表象の性質および母語の影響を検討し、さらに経験量の影響がなぜ現れなかったかを調べる必要がある。

本論文は8章からなる。以下では、各章の要約を述べる。

第1章の「序論」では、語アクセントが発話の理解を助ける働きを持っていることを示し、本研究の意義として、語アクセントがどのように習得されるかが分かれば、語アクセントの学習やその指導にあたり、より効果的な方法を発展させることにつながる可能性があることを挙げる。次に、研究目的と範囲を明記し、調査の全体像を述べる。

最後に、二つの前提のもとに研究を進めることを述べる。一つ目は、調査参加者が学習しているのは、日本語の方言の中で標準語であるという前提である。二つ目は、対象語のアクセント型は恣意的に決まっており、規則では予測できないという前提である。

第2章の「理論的背景」では、日本語の語アクセントについて述べ、日本語の語アクセントを英語の語ストレスおよびイントネーションと比較する。本研究の観点から最も重要であるのは以下の二点である。第一には、日本語には語アクセント、英語には語ストレスという語レベルのプロソディがあるが、日本語の語アクセントはピッチの急な下降で実現されるのに対して、英語の語ストレスはピッチの他、長さ、大きさ、母音の音質などの変化を伴うという違いである。第二には、日本語のアクセント核に結びつくピッチの動きは常に下降であるが、英語では、ストレスのある音節に結びつくピッチの動きは句レベルのイントネーションで決まり、上昇なども可能であることである。

第3章の「先行研究」では、英語話者の生成する日本語の語アクセントを調査している先行研究を概観し、生成されるアクセント型の特徴とそれに影響する要因を述べる。次に、他の言語の語レベルのプロソディであるストレスやトーン習得の研究を参考にし、本章で紹介した研究目的の背景となっている課題をはっきりさせる。

第4章の「方法論」では、調査参加者、録音資料、調査方法について詳しく述べる。

第5章の「語ごとの習得」では、日本語の経験量の異なる二つの学習者群について、標準語との一致率は低く、ある語がどのアクセント型で生成されるかは、その語が標準語に持つアクセント型には、それほど影響されないということを示す。この結果から、語ごとの習得—すなわち語ごとにアクセント型を知覚し音韻表象にエンコードすること—が英語話者に困難である可能性を論じる。

第6章の「規則によるアクセント付与」では、日本語の経験量の異なる二つの学習者群について、生成するアクセント型は語の拍数と品詞、語が置かれた発話環境によって異なり、さらに動詞の場合には付加語によっても異なるということを示す。この結果から、アクセント付与はある程度中間言語の規則に従って行われることが分かる。しかしながら、各学習者群では、拍数、品詞、発話環境がすべて統一してある資料語でも、様々なアクセント型が生成され、特定のアクセント型だけで生成される強い傾向はないことも示す。少なくとも本研究の対象である軽音節のみで構成される語については、生成されるアクセント型を語の拍数、品詞、発話環境から予測ができるほどの絶対的な中間言語規則はなく、アクセント付与は複数の要因の競合によって決まるのではないかということ論じる。

第7章の「各個人の傾向」では、学習者群全体ではなく、各学習者の傾向に焦点を当て、生成されやすい・されにくいアクセント型をはじめ、標準語の影響が出やすい・出にくいアクセント型や資料語のタイプにも、生成されるアクセント型と拍数、品詞、発話環境との関係にも、大きな個人差があることを示す。一方で標準語との一致率に関しては、どの学習者も低いという結果が得られた。これらの結果から、標準語のアクセント型を語ごとに習得することが困難で、各学習者はそれぞれ独特のアクセント型の体系

を作り出している可能性について言及する。

最後に、第8章の「全体の考察」では、第5章～第7章の結果に基づき、以下の二点を示す。まず、アクセント型を音韻表象にエンコードすることが困難であるのは、ピッチを語の特徴として解釈することが英語話者にとって困難であることに原因があるという可能性を論じる。ピッチの働きは上述したように日本語と英語で異なり、英語の語ストレスは日本語の語アクセントと異なりピッチ以外に他の音声的特徴を持つ。次に、学習者間の大きな差異は、各学習者がアクセント型の音韻表象を持たないことにより、主に非予測的であるアクセント体系を持つ標準語から、規則性を探ろうとした結果、形成されたのではないかという可能性について言及する。最後に今後の課題として、音韻表象の性質および母語の影響を検討し、さらに経験量の影響がなぜ現れなかったかを調べる必要があることを指摘し、本研究の結果が日本語教育にどのように応用できるかを述べる。